日本醫史學雜誌

第9巻 第1号

昭和33年4月1日発行

第60回日本医史学会総会講演要旨

特別講演……(1)

幕末における蘭学医家の語学研究……安田竜夫……(1)

日蘭医学交流史
——十七世紀における日蘭医学の交渉——……大鳥蘭三郎……(7)

一般講演……(13)

雑報……(27)

昭和33年4月12・13日開催

会場　日本大学医学部新館講堂

東京都板橋区大谷口町　国電池袋駅西口より日大病院行バスにて終点下車

会長　内山孝一

通巻 第1351号

日本医史学会

振替口座　東京15250番

日本医史学会沿革

明治二五年（一八九二）富士川游氏らの発起により、先人の遺業を顕彰して医道の昂揚を図らんとする私立奨進医会を日本医史学会の前身とする。この年三月四日、杉田玄白らが小塚原観臓の記念日を卜し、東京根岸の古能波奈園において先哲追薦会を挙行し、爾後毎年これを挙行し総会を兼ねた。機関誌として「奨進医談」を刊行したが、のち内外の最新医学を紹介し併せて医道精神を昂揚するため、明治十三年（一八八〇）原田貞吉氏らが創刊せる「中外医事新報」を継承して機関誌となし、爾後、通巻一三三四号におよんだ。

大正四年（一九一五）一月、私立奨進医会を改組し、医史と道義に関する部門を分立して奨進医会と称し、他の事業部門を日本医師協会とし「中外医事新報」を奨進医会機関誌として従前通りの編集方針を続行した。

昭和二年（一九二七）十一月十四日、奨進医会を日本医史学会と改称し、機関誌「中外医事新報」を第一一一七号（大正十五年十一月二十日発行）より、医史に関する専門誌として編集方針を変更。

昭和三年（一九二八）三月、会則その他を定め、初代理事長に呉秀三氏就任。

昭和七年（一九三二）三月、呉秀三氏の死去により入沢達吉氏理事長となる。

昭和九年（一九三四）四月、第九回日本医学会総会に際し、本会は第一分科会に加入し今日にいたる。

昭和十三年（一九三八）入沢達吉氏の死去により三代目理事長に富士川游氏就任。

昭和十六年（一九四一）一月、四代目理事長藤浪剛一氏就任。「中外医事新報」を第一二八七号以降「日本医史学雑誌」と改題す。

昭和十七年（一九四二）十二月、藤浪剛一氏の死去により五代目理事長に山崎佐氏就任。

昭和二十年（一九四五）一月、戦災により印刷所焼失のため、「日本医史学雑誌」発刊不能となり第一三三四号をもって休刊。

昭和二三年（一九四八）三月、戦後中絶せる恒例の医家先哲会を復興し、第五五回総会を挙行。

昭和二四年（一九四九）一月、中野操氏らの発起により昭和十三年に設立された杏林温故会を本会の支部組織とし、日本医史学会関西支部と称し、支部長に中野操氏就任。

昭和二七年（一九五二）十二月、関西支部機関誌「医譚」復刊（昭和十三年創刊より昭和十九年六月休刊まで十七号発刊）

昭和二八年（一九五三）七月、山崎佐氏理事長を辞し、六代目理事長に内山孝一氏就任。会則を改め、機関誌復刊を計画す。

昭和二九年（一九五四）三月、機関誌「日本医史学雑誌」復刊通巻制を廃し昭和十六年の改題時に溯り一年分を一巻とす。復刊第一号の通刊第一三三五号を第五巻第一号とす。同年三月二八日恒例の先哲医家追薦会を総会と改称し、第五六回総会を開き、毎年一回開催に定む。同年九月、第十四回国際医史学会議に始めて参加し、理事小川鼎三氏ローマの会議に本会代表として出席。

昭和三三年（一九五八）第六〇回総会開催に当り、記念事業として「医学古典集」を発刊。四月現在「日本医史学雑誌」は第九巻第一号まで復刊以降十七号を刊行、また関西支部の「医譚」は通巻第三四号復刊以降十七号を刊行「医学古典集」は一期十冊とし、うち二冊既刊、以下逐次刊行の予定。

第六〇回日本医史学会総会講演要旨

特別講演

幕末における蘭学医家の語学研究

安田竜夫

一

蘭学といえば杉田玄白の「蘭学事始」を思い出すのは自然の勢であります。この書物は文化十二年、玄白八十三才の時書かれたもので、「解体新書」出版の時からすでに四十年以上を経ております関係上、玄白自身の記憶の混同も間々認められますけれども、今日得られる資料として最も重要なものであることは間違いありません。

但し書中にオランダ語の学習が八代将軍吉宗の時、長崎のオランダ通詞西善三郎、吉雄幸左衛門等の献言によって始めて許されたがごとく述べているのは明らかに誤りであります。いかにノンキな時代でも、オランダ渡来以来百四十年以上も通詞がオランダ語を知らなかつたとは考えられません。また史料を参照しても、「商館長日誌」一六七三年（延宝元年）十一月九日の条に、長崎奉行の命令で十才から十二才の少年数名を毎日出島に遣して、オランダ語の読み方書き方を稽古せしめることとなったとあります。また「通航一覧」にも『寛文十一年九月晦日附阿蘭陀通詞起請文前書』に『弥無油断、阿蘭陀詞稽古可仕候』と誓つております。ケンプェルの「日本史」の序文にも彼が一日本人にオランダ語を教えたことを記してあります。ゆえに長崎においては、吉宗の所謂『解禁』以前にオランダ語に通じた通詞がおり彼等は蘭文を解し得たと考えられるのが当を得ていると思います。

それでは杉田玄白が「解体新書」飜訳に当つた当時、江戸の人のオランダ語に関する知識は如何であつたかが問題とな

ります。一同の盟主と仰いだ前野良沢だけは、青木昆陽の晩年にその弟子となり、昆陽もその志に感じて蘊奥を伝えたといわれます。時に明和六年、良沢四十七才の時でありました。良沢にオランダ語を学ぶ機縁を与えたのは、淀藩の坂江鷗という人で、ある日この人が蘭書の残編を示して良沢にこれは読めるだろうかと申しました。当時良沢はもちろんオランダ語もオランダ文字も知らなかったのでありますが、同じ人間の書いたものが読めない筈がないと、志を立て青木昆陽に入門することになりました。昆陽の死後、再度長崎に遊び、吉雄や楢林等の通詞に学び、オランダ語の辞書と医書その他を譲りうけて江戸に帰り、独学で相当のところまで進んだのでありました。

これに反し玄白の方は小塚原の腑分の時まではＡＢＣも知なかったのでした。始めは江戸にきた甲比丹 Jan Crans に随行した通詞西善三郎にオランダ語を習いたい旨申入れましたが西に drink, aantrekken 等の語を聞かされて「およしなさい」といわれるまま、学習をあきらめました。

この西善三郎は（明和五年五十五才で歿）始めて蘭日辞書の編纂に着手した人で、「商館長日誌」一七六七年（明和四年）七月十三日の条に Pieter Marin のＡとＢの部を訳したと出ております。また KunstWoordenboek という辞書をオランダ人から借りて、三部もその写本を作つたので、オランダ人もその書を直ちに彼に与えたことも「蘭学事始」にのつています。玄白は「蘭学事始」の中で、自分のことは謙遜して書いておりますから、当時の蘭学知識は単にあてずつぽうであつたかのごとく誤解している人も少くありません。例をあげますと、第一に『眉というものは目の上に生じたる毛なりと有るようなる一句、紡彿として、長き日の春の一日には明らめられず』とあるので、こんなに簡単なことがわからないでは彼等の語学の力も知れていると解する人もあるでしよう。しかし訳は『雙眉、毛斜生者也……』と誤りなくついています。

第二に『ある日、鼻の所にてフルヘツヘンドせしものなりとあるに至りしにこの語わからずいかにもせんようなし。ようやく長崎より良沢求め帰りし簡略なる一小冊ありしを見合たるに、木の枝を断ちたる迹、フルヘツヘンドをなし、また庭を掃除すれば、その塵土集りフルヘツヘンドすというようによみ出せり、時に翁思うに……鼻は面中にありて堆起する

ものなればフルヘッヘンドは堆といふことなるべし。……其時のうれしさ、何にたとへん方もなく、連城の玉を得し心地せり』とあります。これは玄白の思い違いで、鼻の所には原書では wrheffend（堆）ではなく、vooruitsteekend（突出する）という字を用いてあります。そして訳にも『夫鼻者隆起……』とあります。

以上の二カ所は玄白が読書の気持をおしはかつて多少潤色したというか、面白く読ませるために書いたようです。決して当時の学者の語学力が劣つていたと考えてはなりません。一月に六七回も集つて、凡そ一年余も過ぎた頃は『語訳も漸く増し、読に随ひ自然と彼国の事態も了解する様にて、後々は其章句の疎き所は、一日に十行も、その余も、格別の労苦なく解し得るやうに』なつたとありますから、語学力の進歩も驚くべきものといわなければなりません。

二

蘭学の第二段の発達は『蘭学階梯』二巻を作つた大槻玄沢の功に帰せなければなりません。玄沢という名は玄白と良沢の一字宛を頂いたものといわれます。奥州一ノ関の医官建部清庵に見込まれ、次男の亮策と共に江戸に出て玄白の門に入ることになりました。時に安永七年、玄沢は当時二十二才でありました。「蘭学事始」の中にも『此男の天性を見るに、凡そ物を学ぶ事、実地を踏ざればなすことなく、心に徹底せざる事は筆舌に上せず。一体豪気は薄けれどもすべて浮たる事を好ず。和蘭の究理学には生れ得たる才ある人なり』と書かれています。後に長崎に遊学（天明五年二十九才）江戸に帰つてから芝蘭堂という学塾を開きました。本職は伊達候の医官であります。そして天明八年三十二才の時「蘭学階梯」を出版したのであります。

この本には上巻は日蘭交渉のことから蘭学が有用なことを説き、下巻に蘭語の学習方法を簡単に説明したもので、蘭学の入門書としてその後独自の立場を占めました。序文は彼の後援者であつた福知山の朽木昌綱候が書いていますが、その中に中世以来日本はシナ以外に国はないと思つているが、大いに蘭書により世界の地理を学びたい希望を洩しています。果して侯は寛政元年「新撰泰西輿地図説」を著し、さらに「西洋銭譜」という著述もあります。

大槻玄沢はこのほか師の杉田玄白から「解体新書」の校正増補を依嘱せられ、「重訂解体新書」十三巻を書き、文政九

年彼の七十才の時に出版いたしました。その附図は「医範提綱」の附図が文化五年亜欧堂田善の銅版で出版されたのに次いで有名であります。

玄沢につづくものとしては、Gorterの内科書を訳して「西説内科撰要」を出版した宇田川玄随、京阪の地に蘭学の基を築いた小石元俊、橋本宗吉の名をあぐべきでありましょう。始め蘭学が医者どもの唱え出した学派であつたとは実は偶然のことであつたかも知れませんが、玄白、良沢、淳庵等が医官であつた関係上、玄沢、玄随、元俊等が皆東都や地方の医者であつたことは見逃し得ない事実であります。その後も緒方洪庵に至るまで、蘭学が多く医者の家に伝つたことは、一つには医学が人体という何人にも明らかに認められるものを中心として発達したものであるので、これに関する西洋の学が日本に入りやすかつたこと、二つには衣食の資を医業に求めて別に学問を励むものが多かつたことが挙げられます。蘭学には関係ありませんが、かの本居宣長は松阪の開業医でありました。

三

「解体新書」の飜訳が蘭学の第一歩とすれば「蘭学階梯」の出版はその第二歩でありますが、これ以上蘭学を進歩発展せしめるには、どうしても蘭日辞書の編纂と、オランダ語の文法を明らかにするという二つの難問を解決する必要がありました。

「蘭学事始」の終の方には、その辞書編纂について語つています。すなわち稲村三伯の事蹟であります。彼も因州侯池田氏の医官でありましたが「蘭学階梯」を学んで蘭学に志し、寛政四年大槻玄沢の門に入りました。その時、蘭日辞書のないことがはなはだ不便であることを痛感し、西善三郎が前に著手したマーリンの辞書の飜訳を師の玄沢に申入れました。玄沢は話の序でに、自分の知人のもと長崎の通詞である石井恒右衛門という者が今は白河侯（松平定信）の臣になつているが、この人が西の遺志をついで辞書編纂の志があることを物語りました。

三伯は喜んで石井に入門し、訳語を受けては筆記して辞書の編纂につとめました。その後宇田川玄随、岡田甫説も仲間に入れました。石井が君侯に従つて白河へ行く時には、三伯は Halma の蘭仏辞書を玄沢から借りて石井に托したといわ

れます。この辞書は Francois Halma の著書で、わが国にも多く輸入されていました。

石井は郷里でこの辞書のフランス語の部分を日本語にかえて、遂に大体一年で蘭日辞書の原稿を作りあげました。そして翌年（天明七年）江戸へ帰ると共に原稿を三伯に渡し、三伯はさらにこれを校正しました。さて印刷でありますが、オランダ語の原語は活版で印刷し、その傍に手で訳語を書き入れ、遂に三十部の辞書を作りあげました。これが寛政八年で、天明六年からとすれば約十年を要しました。十三巻、六四〇三五語であります。世に大体八万語と申しておりますが今は板沢氏の本にある数字を借りました。

この辞書は俗に「江戸ハルマ」と申しますが、これは別に「長崎ハルマ」と申すものがあるからであります。後者はオランダの甲比丹 Doeff が二〇年近くも長崎に滞在する間に、長崎通詞と力を合せて作つたもので、一名「ヅーフハルマ」とも称し、緒方洪庵の適塾にもこの写本一部を具えていたことは「福翁自伝」によつても知られます。後安政二年になつて桂川月池の請により始めて出版され「和蘭辞彙」十三冊となりました。

部数僅か三十部しかないこの大部の辞書を何とかもつと簡便なものにしたいとは誰しも考えたことでありました。江戸ハルマ刊行後十五年にして文化七年藤林泰助が「訳鍵」二巻を出しまして、その目的を遂げました。これは全部木版で本文二九四枚、薬名三三枚、計三二七枚で、二十一行二段で一枚八四語になるので合計二、七四六八語、約三万語といわれます。藤村は三伯が晩年京都に塾を開いた時の門人であります。時に三伯は海上随鷗と名を改めております。後に安政四年に至り、大野藩の広田憲寛に「訳鍵」を増補改正して五冊の木版本として出版しました。なお藤林本の「訳鍵」には附録一冊がありますが、別に「蘭学逕」という名の単行本もあります。内容は同一で、「江戸ハルマ」の出版の由来から説き起して、蘭語の独習書の体をなしています。

四

オランダ文法を本格的に研究しだしたのは長崎の通詞本木栄之進の弟子にあたる志筑忠雄であります。「蘭学事始」にも『此人（本木）の弟子に志筑忠次郎といへる一訳士ありき。性多病にして早く其職を辞し、他へ遷り、本姓中野に復し

て退隠し、病をもつて世人の交通を謝し、独学んで専ら蘭書に耽り、群書に目をさらし其中彼の科の書を講明したりとなり』とあります。志筑忠次郎は通称で、柳圃と号し、本姓は中野で中野柳圃というも同一人であります。安永五年養父の跡をついで稽古通辞となり、翌六年その職を辞し、本姓中野に復して学究生活に入り、寛政十年に「暦象新書」という訳書を出しました。この志筑忠雄が苦心して「和蘭詞品考」という文法書を作りましたが、人に示さなかつたといいます。彼の門人に馬場佐十郎、この人は語学の天才ともいうべき人で、文化十一年に「訂正蘭語九品集」という文法書を作つております。日本で始めて系統的にロシア語を研究したのも馬場佐十郎であることは有名な事実であります。

その他羽栗洋斉の「六格前篇」(文化十一年)や大槻玄沢の子にあたる玄幹(盤里)の「蘭学凡」(文化十三年)も有名であります。

これより先、文化九年には「訳鍵」の著者藤林泰助の「和蘭語法解」三巻があります。この本は和蘭文法を説いた刊本としては最初のものと思われます。

幕末には箕作院甫が「オランダ文典」前後二冊を飜刻して出版しました。前編は Grammatika で天保十三年、後編は Syntaxis で嘉永元年の出版であります。この二冊によつてオランダ語を学ぶ初学者が大いに益したことは「福翁自伝」に詳細物語られております。

(大阪大学医学部教授)

特別講演

日蘭医学交流史

――十七世紀における日蘭医学の交渉――

大鳥蘭三郎

序説

江戸時代におけるオランダとの交渉が日本の文化全般に対して与えた影響が少なくなかつたことは周知のところである。なかでも日本の医学がオランダとの交渉によつて大きな変革を来したことは否定できない。従つて日蘭医学の交渉についての史的考証も数多くなされているが、その多くは十八世紀の末頃を中心としたいわゆる「蘭学創始」より後のことについて行なわれたものである。オランダが日本と直接交渉を行なつたのは十七世紀の初めの頃で、医学的の交渉もそれより稍々降つた時に始まつている。これ等の事蹟についての考証は数氏によつてなされているが、それ等とても系統だつた詳しいものは少ないように考える。それには拠るべき根本史料が乏しかつたことが最も大きな原因となつているといえる。私は日蘭交渉を知る鍵ともいうべきいわゆる「蘭館日誌」を通読してこれまで知られることの少なかつた十七世紀における日蘭間の医学上の交渉について幾分なりとも知ることができたので、「蘭館日誌」を主要な史料として表題のことに関して調べたところを申上げたい。

一、「蘭館日誌」

いわゆる「蘭館日誌」とはどんなもので、またいかなる内容を持つたものかについて一とおり説明すれば、「蘭館日誌」とは日本に来任したオランダ商館長（Opperhoofd）の公けの日次記録であつて、一六三一年より一八六〇年に亘る二百三

十年間のものである。このうち欠けている分は凡そ十年分位にすぎない。一六三一年より一六四〇年に至るはじめの十年間の分はオランダ商館が平戸に在つた時代のものでそれより後は長崎出島に移されてから後のものである。この長時日に亘り、多くの人が記した「蘭館日誌」の原本は現在オランダのヘーグに在る国立文書館に存する。多くの商館長の手になる「蘭館日誌」の内容は文例によりながらも種々雑多であるが、多方面におよぶ記事を載せている。この記事の内容を板沢武雄教授は一、経済史料、二、政治外交史料、三、学術史料、四、社会史料、五、宗教史料の五つに分類しているが、私が読んだのはこのうちの三に属するものが大部分である。

三、オランダ商館

日本とオランダとの交渉は一六〇〇年より始まつたと考えられているが、正式に通商関係が生じたのは一六〇九年九月九日平戸に貿易商務を行なうための建物が設けられてからのことであると考えられる。この建物がいわゆる「オランダ商館」略して蘭館と呼ぶものであるが、平戸のオランダ商館は種々の事情から一六四〇年末に取壊わされ、一六四一年六月に長崎出島に移り、一八六〇年まで存続した。

オランダ商館には商館長のほかにその次席に位する上席商務員、商務員補、医師、事務員その他の人々がいた。その人数は年によつて変動があるが、二十人から三十人位であつた。「蘭館日誌」一六六二年十一月六日の頃には出島にいる蘭館員の数を二十七人と記し、それぞれの氏名、役名を挙げている。それによれば医師に上級、下級の二名がいたことになつている。この記事から表に示した医師のほかにも医師がいたのではないかと想像される。商館長の任期は原則として一年と定められていた。この原則は始めの間は厳格に守られていたが十八世紀に入ると同じ商館長が翌年も滞留している例がちよいちよいある。これに対し蘭館医師は次年度も引続いて在任したものが多く、なかには三年、四年職にあつたものがあるのは表に示すごとくである。

蘭館長はすべて十月初旬と十一月初旬との間に交替するのが慣わしであつた。従つて「蘭館日誌」はその年の十月初旬から十一月初旬の間に始まり年を越して翌年の十月より十一月に至る間に終るのが例であつた。オランダ商館はその名の

示す通り貿易商務を行なうために設けられたものであるから「蘭館日誌」もこれに関する記事が主として書かれていることはいうまでもないが、その他の方面の事柄についての記事が各処に散見しているのは前に記した通りである。

商館長は将軍に謁見するために参府旅行を行なうのが恒例であつた。商館長は副商館長、医師、書記、助員数名を引率し、江戸に向けて長崎を出発するのが常で、その江戸到着は一月、二月、三月の頃であつた。彼等が江戸の定宿に到着後将軍に謁見するまでには種々の理由からかなり日数がかかつたし、それがすんでからも数日間は江戸に滞在した。この間に商館長または医師と日本人との間にいろいろの接渉が恒例のように行われている。これに関する「蘭館日誌」の記事はここでは特に重要である。江戸参府旅行に要した日数は一定していないが、通常片道四週間かかつている。江戸滞在中を除いては旅行中についての記事は毎年同じようなことの繰り返しである。

「蘭館日誌」は貿易に関することが主体であるから貿易に関する各種の表が掲げられているのは当然である。日蘭間の貿易の他に当時の支那からの輸入品について表も数多く記されている。これ等を見ると支那から多量の医薬品が入つていたことがわかる。またオランダに関心のあつた日本側の奉行または大名からの注文品の記載が間々見える。そのなかに医薬に関する思いがけない記事に時として出合う。これもこの世紀の日蘭間の医学的交渉を説く上に重要な史料となる。

四、考　　按

これまで説明してきたところを背景として「蘭館日誌」の一六四一年より一七〇〇年までに至る日記から医学的関係事項を大体次のごとく分類し、それぞれについて実例をあげて説明を試みることにする。その前にこの期間中に来任した蘭館医の名前を表にして掲げる。

十七世紀に来任した出島蘭館の医員

在任年度 西暦	在任年度 日本暦	氏名	在任年度 西暦	在任年度 日本暦	氏名
1641 — 42	寛永 18 — 19	Juriaen Henselingh	1671 — 72	寛文 11 — 12	Willem Hofman
42 — 43	寛永 19 — 20	Juriaen Henselingh	72 — 73	寛文 12 —延宝1	Willem Hofman
43 — 44	寛永 20 —正保1	Cornelis Stevenszoon	73 — 74	延宝 1 — 2	Willem Hofman
44 — 45	正保 1 — 2		74 — 75	延宝 2 — 3	Willem Hofman
45 — 46	正保 2 — 3	Mathijs Crousen	75 — 76	延宝 3 — 4	Willem ten Rhijne
46 — 47	正保 3 — 4	Mathijs Crousen	76 — 77	延宝 4 — 5	Reinier Weijns
47 — 48	正保 4 —慶安1		77 — 78	延宝 5 — 6	Reinier Weijns
48 — 49	慶安 1 — 2		78 — 79	延宝 6 — 7	
49 — 50	慶安 2 — 3	Casper Schaemburger	79 — 80	延宝 7 — 8	
50 — 51	慶安 3 — 4		80 — 81	延宝 8 —天和1	Jan Bartelsa Benedictus
51 — 52	慶安 4 —承応1		81 — 82	天和 1 — 2	Jan Bartelsa Benedictus
52 — 53	承応 1 — 2		82 — 83	天和 2 — 3	Jan Bartelsa Benedictus
53 — 54	承応 2 — 3	Jan Stipel	83 — 84	天和 3 —貞享1	Hennrik Obe
54 — 55	承応 3 —明暦1	Johannes Wunsch	84 — 85	貞享 1 — 2	Hondrik Obe
55 — 56	明暦 1 — 2		85 — 86	貞享 2 — 3	Hendrik Obe
56 — 57	明暦 2 — 3		86 — 87	貞享 3 — 4	Jan Bartelsa Benedictus
57 — 58	明暦 3 —万治1		87 — 88	貞享 4 —元禄1	Jan Bartelsa Benedictus
58 — 59	万治 1 — 2		88 — 89	元禄 1 — 2	Jan Bartelsa Benedictus
59 — 60	万治 2 — 3		89 — 90	元禄 2 — 3	Jan Stockman
60 — 61	万治 3 —寛文1	Willem Quarles	90 — 91	元禄 3 — 4	Engelbert Kaempfer
61 — 62	寛文 1 — 2		91 — 92	元禄 4 — 5	Engelbert Kaempfer
62 — 63	寛文 2 — 3	Daniel Busch	92 — 93	元禄 5 — 6	Dirk Beekman
63 — 64	寛文 3 — 4	Daniel Busch	93 — 94	元禄 6 — 7	Dirk Beekman
64 — 65	寛文 4 — 5	Daniel Busch	94 — 95	元禄 7 — 8	Matthias Racquet
65 — 66	寛文 5 — 6	Johannes Wunsch	95 — 96	元禄 8 — 9	Matthias Racquet
66 — 67	寛文 6 — 7	Aernout Dirksen	96 — 97	元禄 9 — 10	Matthias Racquet
67 — 68	寛文 7 — 8	Aernout Dirksen	97 — 98	元禄 10 — 11	Matthirs Racquet
68 — 69	寛文 8 — 9	Aernout Dirksen	98 — 99	元禄 11 — 12	Willem Wageman
69 — 70	寛文 9 — 10	Pieter van der Veste	99 —1700	元禄 12 — 13	Jacobus Schoenmaker
70 — 71	寛文 10 — 11	Monses Marcon			

これによればこの期間、五十九年間に蘭館医として来任した人の数は名前の判明している者だけで二十一人である。表を見ればわかる通りこれ等の中には二年から四年間も続けてその任に在つた人もあり、また一度きて帰り、数年後に再びきた人もある。これ等のうちで、カスペル・スハムブルヘル、ウイリアム・テン・ライネ、エンゲルベルト・ケンプフェル等については比較的よく知られているが、この日記ではどのように書かれているかについては最後の項でふれることにする。

イ　医学教授のこと
ロ　病人診療のこと
ハ　長崎郊外へ薬草採集のこと
ニ　江戸にて日本人医者との問答のこと
ホ　薬品輸入のこと
ヘ　オランダ医学に特志をよせる大名、奉行その他の人のこと
ト　スハムブルヘル、ライネ、ケンペルのこと

五、結　語

これまで説明したところを要約すれば次のようになる。

一、十七世紀における日蘭間の交渉は日本側官憲の厳重なる監視の下で行われ、医学的交渉についてもまた同様なる環境のうちで取り行われた。それにもかかわらず日蘭間の医学教授、診療はかなり活発に行われた。またすでにこの時代からいわゆる医術証明書が数通も手交されていることは特記すべきことである。

二、出島に閉じこめられたオランダ人にとつて長崎郊外へ薬草採集に出かけることはこの時代からすでに屢々試みられていた。参府旅行をなして江戸に滞在中に行われた日本人医者との対談はかなり頻繁に取りかわされていた。

三、オランダ、支那両国から輸入された薬品の量は相当に多い。

四、大名、奉行所関係の人々がオランダ医学に寄せた関心は決して小さくなく、井上筑後守政重のごときはオランダ側にとつては余り好ましくない人物と思われているようであるのに解剖学の本を注文しているごときは特殊の地位にある人とはいえ西洋医学への関心が浅くなつたことを示している。

五、テン・ライネの事蹟についてこの記録の示すところは他の蘭館医等のそれよりも一段とすぐれたものであつて、この世紀に日本へきた蘭館医の中で恐らく第一等の学識者であると考えられる。（慶応大学医学部講師）

一般講演

仏典に見られる古代印度医学

―― 特に治療医学の変遷について ――

杉田暉道

古代印度文明を解明する上において、重要な資料となるものは幾つかあるが、中でも仏典が一段と価値あるものであることは今さら改めていうまでもないが、これらの仏典の成立と年代が詳びらかでないことは、他の資料と同様、このような研究においては非常な欠点である。従つて本題名の下において行う治療医学の変遷についての考察も、極めて大まかな分け方で行わざるを得ないことを諒とされたい。

釈迦により興つた仏教は紀元前六世紀より十一世紀の始め頃まで約千五百年にわたつて続いたのであるが、これを原始仏教時代と大乗経典成立以後の時代と二大別し、後者をさらに初期、中期および後期と三区分し、これらの時代の代表的な経典を通して調べ得たことを述べる。

（横浜市大公衆衛生学教室）

チヤラカ本集に見られる医学（その二）

杉田暉道

昨年秋行われた本学会の関東地方会において本題名の下に講演を行つたが、その後さらに引き続いて研究を行つているので、今までのまとめたことを述べたいと思う。

（横浜市大公衆衛生学教室）

三焦の諸問題

吉田一郎

三焦が文献に見られるのは「内経」「難経」等にいちじるしい。三焦が五臓六腑の内の一腑として、古来その形態、機能が不可解とされ、多くの問題を孕むに至つた。すなわち三焦は

一、名のみあつて形なし。
二、水穀の道路である。
三、孤の腑である。
四、原気の別使である。

先づ一、は所謂有名無形説で、これが問題となつたのは宋の陳言の「三因方」(三因極一病証方)あたりらしく、中国歴世の諸大家たとえば宋の徐遁・陳無択・張季明、明の馬仲化・張介賓・李時珍、清の廖論璣・馮楚胆等はいずれも有名有形説を称えたが、確たる立証もなく、わが国江戸期の諸家をはじめ、明治以来の現代の諸氏も、明説を欠く憾がある。演者はこれを現代医学的にも納得できうる、新説を樹てて、大方の批判を乞わんとする。

二―三―四、も三焦に連関する諸問題として、これが解明を試みる。(開業　埼玉県深谷市)

金匱要略の流伝と傷寒論との関係

大　塚　敬　節

清の姚際恆は、その著「古今偽書考」の中で、「金匱要略」は、漢張仲景撰、晉王叔和集となつているが、これは仲景の撰ではなくて、後人の偽託であるとしている。

私は、この説には、賛成できない。私はかつて『逸文より観たる張仲景の医学』と題する論文で「金匱要略」は、張仲景「五蔵論」張仲景「療黄経」張仲景「口歯論」張仲景「療婦人方」などをもとにして、仲景の歿後に、王叔和が編集したものだと考えるとのべたが、私は今日もなお、この立場を堅持している。

唐の王氏の「外台秘要」をみると、今日の「金匱要略」中の条文や薬方を「傷寒論」に出づとして引用している。してみると、王氏がみた「傷寒論」と称する書物は、「傷寒論」と「金匱要略」とを一緒にしたものであつたらしい。ところが、唐の孫思邈がみた「傷寒論」は、「金匱要略」と切りはなした、今日われらがみることのできる「傷寒論」に似た体裁のものであつたらしい。「千金翼方」をみれば、この間の消息が明になる。そこで唐代には「傷寒論」とよばれた書物に「金匱要略」を合冊にしたものと、これを分離したものとの二つの種類のものがあつたことが想像できる。思うに「傷寒論」に「金匱要略」を合したものは、張仲景医学全書に相当するもので、好事家の手になつたものであろう。宋の林億がみた仲景「金匱玉函要略方」三巻も「傷寒論」と「金匱要略」とを合して一部の書物にしたものであつたことは「金匱要略」の序文によつても明かである。

私見をもつてすれば、張仲景の医学思想は「傷寒論」よ

りも、むしろ「金匱要略」において、その特質がみられるこのことには『逸文よりみたる張仲景の医学』の中でもふれておいた。（開業　東京都新宿区三栄町）

古代印度医学を唐に伝えた善無畏三蔵

石原　明

「宋高僧伝」巻二によると、善無畏三蔵は中印度摩伽陀国の人で梵名は戍揭羅僧訶、一に輸婆迦羅 Subharasimha と称し、訳して浄師子、義訳して善無畏という。シヤカ族の甘露飯王の末孫で国王の位にあつたが、難により位を子に譲り、出家して那蘭陀寺の達磨掬多に師事、瑜伽三密の教をうけ秘奥を一時に頓受し即日灌頂して人天の師となり三蔵と称す。のち大唐に至り皇帝の師として遇せられ、開元四年（七一六）梵夾をもたらして長安に達す。同十二年玄宗の駕に従い洛陽に入り福先寺にて一行と共に飜経に従う。同二十年訳業成るを以て帰国せんとせしも詔により不許。同二十三年十月十七日示寂、九十九才。鴻臚卿を贈られ、竜門西山広紀寺に葬せらると。演者は彼の訳経中に医薬の記載を検出し、古代印度医学が始めて本格的に唐に伝えられた証跡を多く得た。今に至るまで真言伝持の八祖の一人として、密教に重要な地位を占める善無畏は、ただに宗祖としてのみならず、東西医学交流史上の重要な人物であることを、その訳経の記文によつて証明しようとするものである。

百数十巻におよぶ訳経の中で、医薬に関する記載のあるものは次のとおりである。

一、大毘盧遮那成仏神変加持経
二、摂大毘盧遮那経大菩憧諸尊密印標識曼陀羅儀軌
三、蘇悉地羯羅経
四、蘇婆呼童子請問経
五、三種蘇悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法
六、仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌
七、仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密陀羅尼
八、火吽供養儀軌
九、無畏三蔵禅要

（横浜市大医史学講座）

奈良時代の名僧鑑真の伝えた医学について

石原　明

官撰史書をはじめ医学史の専書には、必ず奈良時代の代表医家として鑑真の名が記されている。物部広足は勅によつて彼について医を学び、また「鑑真秘方」なる秘伝書もあつたというが、いまは存しない。その生涯については彼の十七回忌に撰した「鑑真過海大師東征伝」(淡海真人撰)や、鎌倉時代に描かれた「東征絵伝」などによつて多くの伝説があるが、鑑真の医学の内容については従来あまり詳しく知られていない。

演者は丹波康頼の「医心方」中に彼の亡佚した医書を引用せる四条の本文を検出し、また彼の附法の門下唐僧法進の「沙弥戒経疏」中の医学関係の記載を精検した結果、鑑真の伝えた医学は、隋の「諸病源候論」に立脚した医説であり、治療方針は孫真人の「千金方」などと系統を同じくする丹薬を主としたものであることが判明した。「紫雪」などの複雑な製剤技術を必要とする薬剤をよく用いていたこと(「医心方」の引文による)からも、彼は当時における最新の医学を伝えたものということができる。

演者は現存史料のすべてにより、鑑真の医学の内容を推察し、これがわが奈良時代の医学におよぼした影響について考察する。(横浜市大医学部医史学講座)

軍陣衛生史ノート

――衛生史の研究　その二十――

三浦豊彦

トラヤン記念柱に軍医らしい人の姿がみられ、ローマ時代にすでに軍医が存在していたことがわかるけれども、わが国の場合にはどの時代からこうした人たちが職業として存在していたのかはつきりわからない。

源平時代には戦う人たちが互に救護し、応急処置をやつたようである。しかし応仁以後には金創医と称する一派がみられるようになつた。

けれどもやや形をととのえてきたのは徳川期に入つてからであつて、文化元(一八〇四)年には原南陽が「砦草」をあらわしている。しかしその内容は余り進んだものではなかつたようである。

幕末になると西洋軍陣医学の影響をうけて新しい軍陣医学書が二三出版されている。そうして欧米の教師たちに教育された人たちによつて、明治時代の軍陣衛生学の発達の基礎がつくられたのである。

今回私は手許の資料に基ずいて覚え書程度ではあるが、日本の軍陣衛生発達史をのべ識者の教示を得たいと思うのである。（労働科学研究所員）

アラビア痘瘡胎毒説東漸考

三木　栄

演者は、左記の順序で、アラビヤ痘瘡胎毒説が中国に伝わり日本、朝鮮におよび、この説が広く用いられ、現在なお胎毒なることばが行われる由来を考証しようと思う。

一、東洋における胎毒説

(A)胎毒の名義、(B)胎毒の起り、(C)銭乙（一〇八〇年頃）以前に胎毒説は存在しない、(D)中、日、鮮における痘瘡原因諸説、(E)中、日、鮮における胎毒説の移り変り

二、アラビア痘瘡胎毒説

(A)アラビアにおける痘瘡胎毒説の起り（一〇世紀'Rhazes, Ali-Abbas等、(B)胎毒説の欧洲における流布

三、アラビア痘瘡胎毒説の東漸

(A)アラビアと中国との痘瘡胎毒説の比較、(B)アラビア痘瘡胎毒説が海路東洋に伝わり銭乙等これを受け入れる。

四、結語

（開業　大阪府堺市熊野町大道筋）

産科学の独立とAmbroise Pare, 並に Jack Guillemeau

佐藤美実

古代並に中世紀には産科治療は女性の手にあり代々伝えられた手技看護の慣習に従うを常道として産婦並に胎児、新生児の生死は全々その幼稚な非科学的な分娩介助に委する外なく、たまたま異常分娩に遭遇した時は所謂創傷医の援助を仰ぐことあるもこれとても産科に無知なもの、または経験浅きものなどの非科学的な手技に待つに過ぎない。

それが十六世紀に入り先ずAmbroise Pare'（1510—1590）により自然科学、解剖学に立脚した産科手術が応用されるようになり、就中胎児足位廻転術を世に広め母児の生命を救う方法としてこれが応用され、ここに産科手術の第一

歩を踏み出した。しかしPareはむしろ創傷医、すなわち外科医として世に立つた人であるが、次いで彼の門弟Jack Guillemeauが産科医として始めて世に現れ、ここに世界最初の産科医を生み出すとともに産科学が外科学より分離して独立する機運を醸生することとなり、自然科学に立脚した産科学は世に生れたのである。そして今日吾人のもつ産科学に通ずる近世産科学の道は開かれた。

（三楽病院産婦人科）

全九集について

中泉行正

数種の「全九集」を供覧し、書誌学的に考察し、書かれた日本文の時代的考察をし、本書の行われた時代環境の歴史的観察を行わんとす。（開業東京都銀座西）

蘭医方癌史

佐藤文比古

初期(1680〜1800)カスパルが蘭医として来朝してから寛政末年までで主として非観血的に乳癌の治療を行つた時代である。癌を記した最初の刊本は山脇道円の「和蘭外科良方」(寛文十年)で『乳岩ハ乳房ニ久シクカタマリ有テ次第ニ大ニナリ後ニハクサリタル汁出ウミハ流レズ瘡ノロニトリ付テアリテ次弟ニロヒロクナリ木瓜ノクチタルヤウニカタク岩穴ノアキタルヤウニアルナリ故ニ乳岩ト名付ルナリ四十己上ノ女ハ治カタシ大事ナリ』とあるものである。その他伊良子道牛の「外科秘方」楢林鎮山の「外科宗伝」吉雄永純の「和蘭外科雑記」等に記載がある。

中期(1801〜1850)享和元年から嘉永年間までで漢蘭折衷家の華岡青洲が文化二年麻酔薬を用い乳癌を切開し全治せしめこの術を門人に拡めた年代である。小森玄良訳「蘭方枢機」江馬元弘訳「和蘭医方纂要」杉田立卿訳「瘍科新選」用薬は鎮痙薬コニウム、草阿片、収斂薬幾那皮が内外用とされた。

後期(1851〜1868)嘉永四年から慶応末年までで乳癌の外鼻癌、舌癌、唇癌、子宮癌、陰嚢癌(箕作阮甫「外科必読」)等の存在が知られた時代で、安政四年ポンペが来朝して組織的に医学を講じてからは病理学的の知識も導入された。文久二年ボードインが来て精得館で独乙最新の説を紹介し

た。その分類は髓様癌、海綿癌、上皮癌、線維癌、胼胝様癌、結定組織癌であつた。坪井信良の「侃斯達篤内科書」（慶応元年）は最も詳細に癌を記した刊行書で癌の解剖症候、癌腫発生および結成、欣衝および経過、終帰および予後、原因、治法の項に分け記載している。緒方郁蔵の「内外新法」（慶応二年）には胃癌、胃管癌の疾候、養生法、治療、薬方等の記がある。文久二年刊の「遠西方彙」慶応二年刊の「新薬百品考」等には多数の治療薬の記載がある。

（明治業大厚生薬学部）

病家要論の著者伊藤玄恕

安西安周

故原田謙太郎博士は、「日本医史学雑誌」第一三二三号（昭和十九年一月二十八日発行）に、『伊藤玄恕著病家要論』と題して、本書が今までの文献成書に見当らないから紹介しておく、とて、名古屋玄医の序文と、伊藤玄恕の自序とて引用し、その内容は古医方の立場から述べた病家心得であつて、医史学上からは大したものではないであろうが、著書と著者の名は医史文献が加えてよかろうと思う、とのべたが、その著者である『伊藤玄恕の経歴については私は今少しも知る所がない』と結んである。

この原田博士の紹介によつて、名古屋玄医の門人伊藤玄恕の「病家要論」の三巻の著書もあることは判明したのであるが、その著者伊藤玄恕については何ら語られていないのである。

演者は、かつて俳聖芭蕉の門人風国が、名古屋玄医の門人なることを、彼の「初蟬集」中にある丹水の追善句により知れるをもつて、風国の俗名が十二というのであつたかを明白にしたいものと、昭和二十七年六月「其角全集」の著者勝峰晋風翁に文書をもつて、さらに八月には、埼玉県桶川町に翁を訪ねて直接に質疑をなし、風国の俗名が、伊藤玄恕なることの示教をうけたのである。よつて「病家要論」を供覧の旁ら、その著者につき右の大要を紹介したいと思う。

さらに風国が向井去来の甥なり、という通説に関する史的確実性についての疑問をも提出したい。

（開業　東京都武蔵野市吉祥寺）

高血圧の史的展望

大　矢　全　節

最近高血圧の治療が重要視されてきたのを契機として高血圧に史的展望を試みてみた。

偶々写本に「中風会戦」と題するものを入手することができたが、これはもとより通俗的の啓蒙書であつて科学的の資料とするのには物足りないが、この写本のできた徳川時代に中風に対する世俗の考え方が躍如としているので参考にはなる。（京都国立病院皮膚科）

骨継治療重宝記について

石原　昂・蒲原　宏

本書は延享三年三月に初版が出て、文化七年三月「整骨新書」(各務文献）と同じ書店から出版されている。

著者は高志鳳翼、名を心海字玄登、号を慈航斎といい摂津難波邑の人で、穂積以貫に古学を学び、本書を著したときは三十才に満たない頃であること以外詳細な伝は不明である。

初版は般若堂と称する自家書屋の自家版と考えられる。本書以外に「医学童子問」、「癲病療治集」、「恥瘡療治発揮」「難産療治重宝記」、「外科秘術重宝記」、「痘瘡療治重宝記」など三十三種の著述があつたようであるが、詳細については不明である。早熟の天才肌の人であつたようである。

本書は「青囊雑纂」中に集録されている「正骨続継方」を根幹として編集されてはいるが、「正体類要」、「東垣医学発明論」、「古今医統」正骨科「瘍科準繩」傷損門「得効方」正骨科などの諸書を参考としているように考えられるけれども、紅毛南蛮外科流の諸書を参考としている点が多くみとめられ、アンブロアス・パレーの外科書の流儀をその治療法中にみとめる。

本書が医学史上重要なことは、当時秘伝、口訣を旨とした骨折、脱臼治療法を公開出版して正しい正骨法のあり方を示したことは「正骨範」の先駆をなすものである点と、整骨麻薬として草烏、当帰、白芷、熱酒を使用し、華岡流麻薬の先駆をなしている点である。

本書の各項における治療法の思想傾向と西欧外科書との関連について述べ、本書が「正骨範」、「整骨要訣」、「整骨

新書」、「難波骨継秘伝」と共に、重要な正骨文献であることを再確認したい。（県立新潟病院整形外科）

吐方と吐方家に関する一考察

山田照胤

吐方は傷寒論にみられる、汗、吐、下三治療法の一つである。この三法のうち汗、下の二法は、江戸時代中期に古方派が台頭して以来まったく普偏化されて、常に古方派治療の基本的な治療法とされてきた。しかるに吐方のみは汗、下の二法に比べて、余り行われることがなかった。その中で、この吐方を盛んに行って、当代医学の一新生面を開いた、所謂吐方家と呼ばれる人たちがあった。

その嚆矢は、越前の奥村良筑であることはいうまでもない。しかしてその門下に、吐方編の著者荻野台州、吐方考の著者永富独嘯庵や山脇東門、田中適所などがある。またこれらのグループとは別に中神琴溪、北村良宅の師弟は独自の吐方をもってそれぞれ精神病の治療を行って治効を挙げたが、この点についてはすでに山田が報告した。

以上のごとく、吐方が余り行われなかった理由としてはこれが危険視されたためと、その実技が明らかでなかったためと考えられるが、吐方家といわれる人たちは、この吐方を敢えて行ったのであり、さらに吐方を精神病の治療に応用したのである。今回はこれらの問題に関してその事情や根拠などについて考祭し、報告する。

（東京医歯大神経科）

ポムペ来朝後最初に出版した種痘書について

中野操

ポムペは安政四年（一八五七）九月二十一日（旧暦八月四日）長崎に来朝して十一月十二日（旧暦九月二十六日）から医学の講義を初めた。翌安政五年（一八五八）に Korte Beschouwing der Pokziekte en Hare Wijzigingen, in Verband met de voorbehoedende Koepok Inenting という小冊子を印刷出版した。本書の序文は前年十二月二十日の日附でできている。

本書の印刷について、またその出版の意義について、いろいろと考察を加えてみたいと思う。（関西支部長）

鹿児島市在の赤倉病院考

鮫島近二

鹿児島市滑川畔にそそり立つ赤倉病院は、そのかみウイリスが使用した病院であつたというが、私は病院には疑問を持つ。先年この赤練瓦の一部が破壊されて、その練瓦に「小根占」という銘があつた。これを同地の古老に聞くに小根占にカラパ山というのがあつて、昔練瓦を焼いていたカラパという外人がいた。このカラパは慶応元年、薩摩藩が松木弘安・五代友厚を監督とし、森有礼・長沢鼎等有為の青少年十五名を英国に留学せしむる時、その案内をした男であるから、赤倉は慶応の初年か元治元年頃かに建築したものと想像される。その他赤倉について述べる。

（開業　東京都新宿区下落合）

明治時代初期における日本の生理学

内山孝一

江戸時代中期にはじまり次第に発達した蘭学において日本の生理学がどの程度のものであつたかについてはすでに拙稿「明治前日本生理学史」に一応まとめた通りである。すなわち伏屋琴坂およびその他一二の人々の行つた独創的な実験的研究の外はすべてオランダ語で書かれた生理学の本の飜訳であつた。

それが明治維新と呼ばれる劃期的時代を迎えるようになつて、わがくにの医学は蘭学の源流ともいえるドイツ医学にその範を主としてとるようになつた。すなわちそれまでの和蘭医官は次第に少くなり、急速にドイツ医官を招いて直ちにドイツ医学に学んだ東京大学医学部に示された医学の国策が、とりも直さずそれ以後の日本の医学にとつて支配的な役割をはたすようになつた。

しかしオランダの医官ボードインあるいはマンスフエルト更にエルメレンス等は幕末並びに明治初期において生理学その他の講義を行つており、彼等ののこした生理学講義は現在においてこれを証するものである。

ドイツの生理学者として来朝した最初の人はエルンスト・チーゲル Frnst Tiegel で、その肖像は現に東京大学医学部生理学教室に掲げられている。すなわちチーゲル教授によつてはじめて本格的な生理学の講義、学生のための

生理学実習が東大医学部においてなされ、更に実験的研究が行われるようになつた。これは明治十年（一八七七）前後のことである。

チーゲル教授来朝以前においても東大医学部で生理学の講義が行われたが、それはドイツから来朝した臨床医学の教授が兼担したに過ぎない。チーゲル教授に学んだ最初の人は大沢謙二である。大沢謙二はその後ドイツに留学もしたが、チーゲル来朝以前から島村鼎甫（生理発蒙の著述が慶応二年、一八六六年に刊行されている）などについては生理学を志していた。

チーゲルと大沢は明治十年（一八七七）に東京大学から最初の研究論文すなわち諸種のヘビ類の脊髄機能に関する研究をドイツの有名な生理学雑誌であるプリューゲルのアルヒフに送り同誌に掲載されたのである。すなわち

Aus den physiologischen Laboratorium zu Tokio (Japan)

"Beobachtungen ueber die Funktionen des Rueckenmarks der Schlangen" von K. Osawa und E. Tiegel. 1877

がそれである。わがくにの現代生理学は明治十年前後からはじまつたといつてよく、日本の生理学の父は大沢謙二といつてよいであろう。

大沢謙二はその後ドイツに留学して研究を続け、イヌの脊髄伝導路についての研究をストラスグルグにおいて発表した。それは明治十五年（一八八二）のことである。

K. Osawa : Untersuchungen ueber die Leitungsbahnen in Rueckenmark des Hundes. Strassburg, 1882

このようにして大沢謙二は東京大学医学部教授として生理学の講座を担任した最初の日本の生理学者となつた。

なお明治時代初期に出版された生理学の本または写本は少くない。今回はそれらについてもその要点を述べる。

（日大医学部教授　理事長）

明治女医の始、生沢クノと その生涯

吉田一郎

「明治諸物起源」なる書物に、女医の初としての名が列してある。その第二位に生沢クノ（埼玉県）とのみ記してあるが、その他の記述がない。先年日本医史学会で吉岡博

人氏が日本女医史についてスライドを映写して明治以来の本邦女医を列挙されたが、その中にも『生沢クノ(埼玉県)』とあるのみでその生没や経歴が不明とされていた。

幸い演者は少年時代から、この女史を知っていたので、その資料を集めカラースライドとして報告する。

○元治元年十二月、現在の埼玉県大里郡川本村畠山に生れる。

○明治十八、十九年にわたって東京にて医術試験に合格医術開業免状を得た。

○東京における開業許可ならず郷里に帰る。

○埼玉県深谷にて実父医師良安の後見にて開業し、次いで川越、児玉、深谷、宇都宮に転々とし、晩年に足利市岩根婦人科病院の副院長として勤務、やがて郷里深谷にて昭和二〇年六月一八日空襲激下、死去した。

○嗜好趣味として、酒・俳句があったが、女史の逝去後火災でその作品や遺愛の医療器、愛用品、蔵書等烏有に帰した。

幸いその筆蹟、肖像写真、各種免許証、通信書、諸届書控等数十点と、日常の生活や女史の性格を見聞した側近の者から、逸話など詳細に知ることを得たので報告する。

(開業　埼玉県深谷市)

中共における医学史教育について

石川光昭

周知のように、中華人民共和国においては一九四九年の解放以来、政治、社会、文化そのほかあらゆる分野にわたって著しい変革が行われたが、医学教育の制度と課程も改革され、全国各地の医学院において医学史の教習が必修課目として課せられている。その講義内容は西洋医学の発達史と中国古来の医学の沿革とを含むものである。それは、今日の中共において中医(漢方医学)の価値が近代の科学的方法によって再検討され、伝統医学をも尊重する風が興っている事実に対応するものと考えられる。

(慈恵医大法医学教室)

蘭方製薬史(第二報)

宗田一

蘭方医学と漢方医学の薬物使用面における相違点の一つは、植物性蒸留精油(香油・水)の使用であろう。漢方では、用に臨んで、生薬類を浸・煎剤として用いるのに対し

蘭方では、開花期その他一定の季節に、予め植物芳香成分を蒸留によつて分離し、油・水剤として貯えておくことが多かつた。従つて、ここに当然、蒸留技術の問題が起つてくる。往時、わが国では、蒸留器を「ランビキ」と俗称していた。これはポルトガル語のAlambiqueの訛語で、このことから、南蛮伝来のものであることを窺わせる。そのため、わが国の蒸留技術は、南蛮人が香油・水の蒸留を伝えたものにはじまると、一般にいわれている。

ところが、南蛮流の外科医書や蘭方医学の初期のものを眺めてみると、蒸留油・水の使用は、意外な程少く、ほとんどないといつてよい位で、大部分は漢方と同じ浸・煎剤か、または油浸法による抽出剤で、時代が下るにつれて、蒸留油・水の数を増してくるのが知り得られる。

一方、南蛮流では、創傷面の洗滌に焼酒（蒸留酒の代表名として使われ、必ずしも今日の焼酒と同一ではない）を使うことが頻回に行われていた。これは、従来のわが国の金瘡医の用いなかつたものである。

このような点から、わが国の蒸留技術伝来を考える上に、香油・水の製造よりも、蒸留酒製造の方が、重要な意味をもつてくるのではないかと考えたい。特に、ランビキの名の普及性からみても、一般人に関係の深い蒸留酒について、従来、兎角軽視されていたきらいがないでもない。

演者が本報において、蒸留酒伝来について考察を試みようと思うのはかかる観点に基く。（吉富製薬バイエル薬品部）

与石考

赤松金芳

礜石は、硫砒鉄鉱 FeAsS で、砒素を三四%も含有している鉱物であるが、すでに「山海経」に『皐塗之山、有白石名曰礜、以毒鼠』と記されている。そして「神農本草経」以後、「新修本草」「証類本草」にも、さらに下つては「本草綱目」にも『礜石』のほかに『特生礜石』だとか『握石礜石』だとかいつたような項目が並べられている日本でも「医心方」「本草和名」にも、それぞれ同様の名が挙げられている。

ところで、その応用方面については「千金方」には『礜石』を用いた処方が、数多く記載せられている。しかも、その中には『礬石』（すなわち明礬）と彼此混淆しているものが少くない。いずれにしても、唐時代には盛に用いられ

たものらしいが、その後に至つては、余りその使用を見かけることが少なくなつたようである。しかるに、和蘭医学の初期において、宇田川玄随の「槐園名物考」によつて、この「礜石」が、いわゆる『生生乳』の製法の中に、再び現れてきている。（昭和薬大）

ニンニクの民間薬史

平塚俊亮

ニンニクは百合科に属する多年生草本で、今は畑に栽培されている。原産地は亜細亜西部であるという。地下に鱗莖があり、全草は強烈な臭気がある。五辛中の中の一つで古名はオホビルといい、ニンニクの称呼は仏徒の隠語であるという。鱗莖は食用として殊に支那朝鮮では盛んに用いられているがわが邦では寧ろ薬食いとして利用されてきた。その薬効としては駆蟲、利尿、鎮静、健胃や強壮薬などとして指示されている。

ニンニクには特有の臭気と味があるためか古代の欧洲人はある神秘的な魔力が潜在しているものと信じたもののごとく、従てニンニクを諸種の疾患に対して治療的に応用したのみならず、疾病の防護にも用い、また護符のように呪術的にも応用した。わが国でも既に記紀にその記載があり現代でもなお民間で呪術的に取扱われている。印度では仏教の戒律にニンニクを食うことは禁制されたが、また医薬としては用いられた。わが国でも僧尼の戒律としては禁制された。神道でも触穢とされたことがある。

薬用としては古代から欧洲を始めわが国でも主に民間薬として諸種疾患に利用されて今日におよんでいるが、近来は食用として料理にも用いられるようになり、またその化学的成分も次第に闡明されてきて、ニンニク製剤も医界に登場している。演者は古代より現代に至るまでの医薬的並に呪術的に利用されたニンニク歴史の概観を試みる。

（東京都江東区あそか病院）

雑報

○西洋医学教育発祥百年記念祭……一九五七年十一月十二日はオランダ医官ポムペ・ファン・メールデルフオールトが、徳川幕府の招きによつて来朝し、始めて長崎で本格的な西洋医学教育を開始した百周年の記念日に当るので、長崎大学医学部ではその百周年記念をかねて盛大な記念祭を挙行した。本学会からは内山理事長代理として石原幹事が列席、祝辞を述べた。記念事業としてポムペの「日本滞在五年」の抄訳は、荒瀬進氏の訳により本誌第八巻第一・二号として同会の援助により既刊、別に単行本として一般に頒布された。なお当日は本会理事山崎佐・緒方富雄両博士の記念講演が行われ、盛況を極めた。

○医学古典集発刊……かねて本学会六〇回総会の記念事業として企画されていた「医学古典集」は慎重に計画していたが、左記のとおりいよいよ発刊の運びとなり、後世に残る大事業として発足をみることになつた。

医学古典集刊行の辞

近年急速に発展し来つたわが国の医学は、僅かな期間に少数の先輩によつて築き上げられたものでないことは、明白な事実である。有史以来一千有余年におよぶ日本医学の流れのうちに育成された、多くの貴重な業績を基盤としてその上に築き上げられたものに他ならない。医学の史的発展のあとを知ることは、新しい医学を創成するための基礎作業である。医史学の必要性が再認識され、研究者も増加の一途をたどつているが、何としても最大の障碍は、研究資料の入手が容易でない点にある。各時代の医学の代表的文献さえも、一流の図書館に揃つていない状態である。わが日本医史学会は明治二十五年、前身たる奨進医会が第一回総会を開いて以来、今年を以て六十五年の歴史を誇り、第六十回総会を挙行することになつた。これを機会に記念事業として「医学古典集」の刊行を企図した次第である。僅かに書写によつて存する流伝稀なる文献、版本といえども、その数稀少にして片々たる一冊に数万金を投ずるがごとき、天壌間存ずるところただ一部という孤本の類、これらの中にあつて、医学史料として重要な価値を有するものを博捜し、専門研究者の厳密なる校訂と平易なる解説を附し、一期十冊を単位として広く一般研究者の座右に供しようとするものである。

この刊行には、同人今田見信博士の厚意に負うところ少

くないが、私どもは前途多難を覚悟して刊行するつもりである。大方の御支援をお願いする。

日本医史学会理事長　内山孝一

第一期　刊行予定書目

1、勧医抄　望月三英著　原田謙太郎校訂・解説　既刊四五〇円
2、松香私志　長与専斎著　山崎佐校訂・解説　近刊四〇〇円
3、造物余譚　三浦梅園著　越俎弄筆　中井履軒著　自筆稿本影印　小川鼎三解説　五月刊行予定
4、杉田玄白未刊随筆五種（狂医之言・乱心二十四条・玉味噌・耄耋独語・壱斎遺稿）大鳥蘭三郎・石原明　校訂・解説
5、人身究理小解　緒方洪庵訳　生機論　岡研海著（石原明和訳）内山孝一校訂・解説
6、和蘭医話　伏屋素狄著　内山孝一校訂・解説
7、扁鵲倉公伝　漢・司馬遷著　渡辺幸三和訳・校訂・解説
8、後見草・野叟独語　杉田玄白著　石原明校訂・解説
9、医事撥乱　山県大弐著　安西安周和訳・校訂・解説
10、和蘭事始　杉田玄白著　内山孝一校訂・解説

以上第一期十冊は昭和三四年三月までに刊行の予定、なお刊行順序は多少変更があるので御了承願いたい。購入希望者は東京都文京区駒込片町三二医歯薬出版株式会社（振替口座東京一三八一六番）宛、直接申込まれたい。学会では編集事務だけで販売取次はしないから、御手数でも右のようにお願いする。

○蘭学創始地標識設置と顕彰……日本における蘭学の発祥は今から一八七年前の明和八年、杉田玄白の発起により同志六人が、ターヘル・アナトミナ反訳のため、三月五日（旧暦）に江戸築地鉄砲洲豊前中津藩奥平候中屋敷にあつた前野良沢の自宅に集つたことが史実に明かであるが、たまたまこの場所は現在の聖ルカ国際病院の敷地内であることが判り、すでに昭和十六年に東京都から史蹟名勝地に指定されていたまま、大戦をはさんで忘れられていたので、聖ルカ病院の橋本寛敏院長の発意によりとりあえずささやかながらも標識を建てることになり、本学会の名で左のごとき説明文を緒方富雄理事が起草、去る三月五日、本学会と聖ルカ病院の主催で記念顕彰式を挙行した。将来、碑にする計画である。全文左の通り。

蘭学の泉はここにわき出た

江戸築地鉄砲洲豊前中津藩主　奥平邸内
前野良沢自宅のあと

一七七一年（明和八年）三月四日杉田玄白は前野良沢中川淳庵等をさそつて、千住小塚原刑場にはじめて腑分を見にいつた。そしてオランダ語の解剖書ターヘル・アナトミアの図の正確なのにおどろき、西洋の学術の着実なのに感心した。

その帰りみち三人は、あすからでもこの本を訳して、一日もはやく日本の医学の役にたてたいとおもつた。

あくる三月五日、みんなは早速前野良沢の宅にあつまつた。そして、そのつもりになつてターヘル・アナトミアを見ると、一体どうして訳していけばいいのか、まるで見当がつかない。この日から彼等の苦心がはじまつた。

そして一七七四年（安永三年）西洋学術の日本最初の訳書「解体新書」を刊行した。

これがさきがけになつて、蘭学がさかんになり、西洋の学術をとりいれる大きなたすけになつた。

こうして、この地にわき出た蘭学の泉は、日本の近代文化の流にかぎりない生気をそそぎつづけた。

一九五八年（昭和三十三年）三月五日

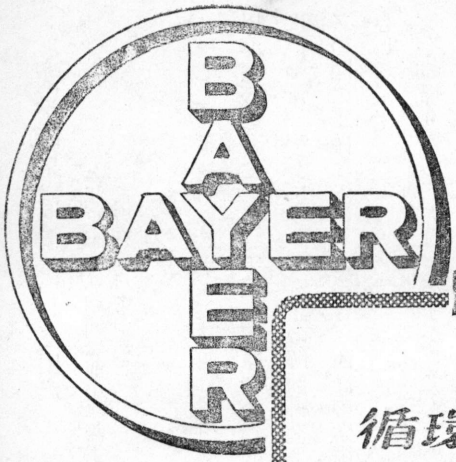
日本医史学会

○第十七回国際医師学会議……一九五八年九月二十二日から二十八日までフランスのMontpellier大学医学部において、同大医学部長Prof Giraud会長のもとに、第十七回国際医史学会議が開催せられる旨、総幹事Dr. L. Dulieuから、私のところに連絡があつた。演題の主なものは

一、最近百年間における各国の医学研究機関とMontpellier大学との関係
一、病院研究室の歴史ならびにその発達
一、第十七世紀における医学に関する絵画
一、治療学に対する新世界の寄与　等である。

参加会費は会員は四千フラン、その同伴者は三千五百フラン、会員でないものは六千フランを納入しなければならぬ。（横浜医科大学　津崎孝道報）

日本医史学雑誌　第九巻　第一号
昭和三十三年四月五日印刷
昭和三十三年四月十日発行
発行所　東京都板橋区大谷口町日本大学内　日本医史学会
編集者　横浜市中区長者町三ノ三二　石原明
印刷所　横浜市南区白妙町二ノ七　杉本紙器印刷株式会社



健保適用品

ドイツ・バイエル製

循環系障害に…

カリクレイン

冠状動脈，脳，横紋筋，皮膚及び肺の末梢血管の拡張作用のみならず，血管痙攣の抑制作用もあり，全身の血行を改善し，組織への栄養を良好にいたします．

注：	10単位	5管	¥ 840
	〃	50管	¥ 5,800
錠：	10単位	20錠	¥ 980
	〃	100錠	¥ 4,300

強力治療には…

デポ-カリクレイン

カリクレインの作用を，更に高度に且つ持続的に発揮せしめる目的でつくられた本剤は，循環系障害の強力治療に特に好適であります．

注：	40単位	5管	¥ 1,800
	〃	25管	¥ 7,900

輸入元　吉富製薬株式会社　大阪市東区道修町2-26
販売元　武田薬品工業株式会社　大阪市東区道修町2-27

(A137)

日本医史学会小誌

本会創弁在公元1892年、富士川游氏等首唱先人之遺業顕彰和医道的発揚、結成了「私立奨進医会」為此本会的先駆・爾後発刊了「奨進医談」与「中外医事新報」両個的報紙・在1927年改称「日本医史学会」、専弁編刊史的専誌・在1941年4世董事藤浪剛一氏時、改称「日本医史学雑誌」・自1945年至1953年由戦後多難事休刊了・1954年春復刊、現在刊出17号・別在大阪関西支部、董事中野操氏刊出「医譚」此亦為本会機関誌・吾們請親愛的中華医史専家諸先生、祖先宝貴的古代医学遺産交流探討、相俱工作世界人類幸福！特致敬礼・郵寄宝貴意見和文籍交換、下記地址・

日本医史学会総経淮：横浜市中区長者町 3－32　石原　明

日本医史学会関西支部：大阪市阿倍野区晴明通 2－21　中野　操

The Japanese Society of the Medical History

History: Founded in 1892, by Dr. Y. Fujikawa.

Purpose: To encourage the study on medical history, teaching as well as publication and research on medicine,

Publications: (1) "Journal of the Japanese Society of Medical History" (Nihon Ishigaku Zasshi) 1941～1944: 1954～to date. Q. B5. P.V. Free to members.

Formerly: "Chugai Iji Shinpo" 1927～1940.

(2) "I tan" (Journal of the Kansai Branch of J.S.M.H) 1938～1943: 1952～to date. Q. B5. p.v

President: Koichi Uchiyama. (Nihon Univ. Med. School)

Secretaries: Akira Ishihara. (Yokohama Univ. Med. School)

President of the Kansai branch: Misao Nakano (Osaka)

Address of the office: C/O Department of physiology. Nihon University. School of Medicine. Itabashi, Tokyo. Japan.

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the

Japanese Society of Medical History.

Vol. 9. No. 1. April, 1958.

CONTENTS

The 60th General Meeting of the

Japanese Society of Medical History

(12～13. April, 1958. Nihon Univ.)

Special Lectures ..... (1)

Studies of Dutch language by physicians of late Edo period. ..... Tastuo Yasuda ..... (1)

The history of medical relations between Japan and Holland. ..... Ranzaburo Ohtori ..... (7)

General Report ..... (13)

News ..... (27)

The Japanese Society of Medical History

President : Prof. Dr. Koichi Uchiyama.

c/o Department of Physiology. Nihon University.

School of Medicine. Itabashi, Tokyo.